



『たった、それだけ』

宮下 奈都／著 双葉社



贈賄の罪を背負い失踪した望月正幸。彼の失踪のきっかけを作った女、妻、姉、娘。一人の男の失踪で翻弄される人々と、その周辺人物それぞれに凍てつく冬のような試練が待ち受けていますが、物語のラストには暖かな季節の到来を予感させる一冊です。

『かぐわしき植物たちの秘密』

田中 修／著 丹治 邦和／著 山と溪谷社



本書では 63 種類の植物の香りを、その成分とともに解説しています。例えば、春の訪れをいち早く告げる梅は「春告げ草」という別名を持ち、その豊かな香りは南高梅で有名な和歌山県日高郡で「一目百万、香り十里」（百万本で香りが十里も飛ぶ）と言われているそうです。本書で、自然の香りの魅力に注目してみませんか。

芽吹



長い冬が終わり、待ち遠しかった春がやってきました。新成人や新社会人になる皆さんにとっては、人生の節目となる季節ですね。それぞれの春の到来を感じる本を集めてみました。

『チェリー・イングラム』

日本の桜を救ったイギリス人』

阿部 菜穂子／著 岩波書店



太白(たいはく)という桜の品種をご存知でしょうか。日本で絶滅の危機にあった品種で、桜に魅了されたあるイギリス人が英国の地で育てていたことにより救われました。イギリスでは桜は生命の再生を知らせる春の花といわれ、本書では彼の桜に対する情熱が描かれています。

『ニサッタ、ニサッタ』

乃南 アサ／著 講談社



何をやってもうまくいかない主人公・耕平は、会社の倒産から始まった転落人生を立て直すべく、心機一転故郷で再起を図ることに。心身ともに追い詰められた耕平を唯一励ましてくれる祖母の言葉が胸に迫ります。最後に見えるかすかな光に希望を感じる物語です。

郷土を知る楽しみ



郷土コーナー

中央図書館に入って左側に新潟県や新潟県内の市町村に関する資料を集めた郷土コーナーがあります。新潟県内のガイドブックや郷土史、新潟県ゆかりの作家など、郷土に関する資料を集めています。

今回はこの中から利用の多い「郷土テーマ棚」「市町村史棚」「市政コーナー」を紹介します。これらの資料を利用して郷土愛を深めてみませんか。

郷土テーマ棚



長岡ゆかりの「河井継之助」「山本五十六」等の人物や戊辰戦争、長岡空襲、中越地震、長岡花火、長岡野菜などが揃っています。



『峠』上・中・下巻

司馬 遼太郎／著 新潮社

1966年から1968年に「毎日新聞」で連載され、長岡藩家老・河井継之助を世に広めた作品です。2018年に県内ロケが行われて映画化、公開が待たれます。



『越後長岡花火プレミアムフォト集』
長谷川 健一／監修
長岡花火デザインプロジェクト



『繋ごう未来へ Phoenix 長岡花火プレミアムフォト集Ⅱ』
長岡花火デザインプロジェクト／企画
長岡花火デザインプロジェクト

長岡が誇る「三尺玉」「フェニックス」等の素晴らしさを再確認できる、とても美しい写真集です。

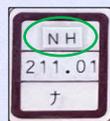
市町村史棚



『新潟県史』をはじめ、県内各市町村史があります。また、『長岡市史双書』や『長岡歴史事典』など研究書や辞典もあります。



合併市町村史(中之島、越路、三島、山古志、小国、和島、寺泊、栃尾、与板、川口)で各地域の歴史を調べることができます。



この棚の別置記号は「NH」です

市政コーナー



「アオーレ長岡」のガイドブックや「長岡市統計年鑑」など、行政資料をまとめたコーナーです。



「ながおか市政だより」は試版号から揃っています(昭和29年8月～平成8年4月までは縮刷版、平成8年1月～通常版)。



分野ごとにシールの色が違います。

請求記号に貼ってある黄色の透明シールが目印です。

学ぶ、伝える、究める－新しい文書資料室をめざして ～文書資料室だより～

文書資料室は、長岡市史編さん室の業務と所蔵資料を引き継いで、平成10年(1998)4月に開室しました。郷土長岡のアーカイブとして、どのような役割を果たすことができるのか。ウイルス禍で取り組んだ令和3年度の主な事業を振り返りつつ、当室の将来像を考えてみます。キーワードは、「学ぶ」「伝える」「究める」です。

キーワードの第一、「学ぶ」は所蔵資料を活用した行事の開催です。昨年度は、古文書解説講座と長岡市史双書を読む会を計13回実施(のべ334人参加)。市史双書を読む会では、中央図書館の反町茂雄文庫展と連携して、講座と展示会を組み合わせた学びの場づくりに挑戦しました。

第二の「伝える」は、地道な資料整理の積み重ねです。昨年度よりホームページ上での所蔵資料目録の公開を開始。長岡市資料整理ボランティアの活動では、古志郡村松村金子家文書と災害・復興に関わる新聞資料の整理に取り組みました(計12回実施、のべ86人参加)。

第三の「究める」は、自治体史編さんの成果を受け継いだ歴史研究の推進です。整理した所蔵資料を市史双書等の刊行物で紹介し、当室に事務局を置く長岡郷土史研

究会の会誌をはじめ様々な分野で活用。市域の歴史研究に新しい視点を加えています。

文書資料室は、令和5年度に旧サンライフ長岡(長倉西町)の建物に移転します。今年度はオープンに向けた準備を行います。「学ぶ」「伝える」「究める」活動を相互に関連させながら、市域の歴史資料を保存・活用する業務を継続・拡充します。市史編さん室12年、文書資料室24年の活動をふまえた将来像を構想中です。(田中洋史)



▲古文書解説講座「古文書に見る長岡のすがた」
地域に伝わる古文書を題材に、歴史研究の基礎知識を学んでいます。(令和3年10月、於中央公民館)

中央図書館所蔵資料紹介 No.172 山本義和 書

桃李言わざれども 下おのづから蹊を成す

これは中国の『史記』、李將軍列伝のなかに見える故事です。

「桃や李は何も言わないが、果実が美味しいので人が集まってくる、その下には自然と道ができる」つまり、徳のある人物のもとには、その人は黙っていても自然と人々が慕いつどってくる、という意味を持っています。

書の右上に表された引首印の文字は「先憂後楽」。これは「民衆に先立って天下のことを憂い、民衆が生活を楽しめるようになったのちに楽しむ」という政治家の心がけを説いた言葉です。

この書を認めた山本義和(勘右衛門、松所)は、長岡藩家老の山本家11代当主で、のちに北越戊辰戦争で大隊長を務めた山本帯刀(義路)の養父でもあります。

山本家は、三河以来代々牧野家の家臣として藩政を担い、信頼を積み重ねてきた名家です。義和もまた家老職を継ぎ、人徳の大切さを身にしみ感じていたのかも知れません。(小熊よしみ)

☆4月1日(金)～4月24日(日)中央図書館エントランスギャラリーで展示します。

桃李不言
下自成蹊
松所書





おはなし会

中央図書館では「おはなし会」を開催しています。申込は不要です。お子さんやお孫さんと一緒に気軽にお越しください。



- 毎週火曜日 10:30～ お話の部屋*ミニ
- 毎週水曜日 15:30～ おはなしくるりんぱ
- 毎週木曜日 10:30～ チビッコタイム
- 毎週金曜日 10:30～ おはなしくるりんぱ
- 毎週土曜日 14:30～ お話の部屋*ミニ
- 第4土曜日 14:00～ 紙芝居ドン!パラリン
- 第5土曜日 14:30～ つぐみの会
- 第1日曜日 14:30～ 日曜おはなし会

市内企業の社史、パンフレットを集めています

- ・蔵書として登録し、閲覧や貸し出しを行います。
- ・市内に本社または支社、事業所などがある会社が対象です。
- ・中央図書館宛てに各2部送付をお願いいたします。



そうだ、図書館に聞いてみよう！
レファレンス・サービス(調べもの相談)

図書館では調べものの解決に役立つ本や統計データを探すお手伝いをしています。相談事例をご紹介します。

Q 栃尾鉄道について調べたいので、文献を紹介してほしい。

栃尾鉄道とは「トツテツ」の名で親しまれた軽便鉄道。栃尾から悠久山まで約1時間半で結んだ。昭和50年に全線廃止となった。

A 紹介した本

『新潟県の廃線を歩く』

新潟日報事業社

…栃尾鉄道の歴史をわかりやすくコンパクトに紹介

『昭和の終着駅』北陸・信越篇

安田 就視/写真 松本 典久/文 交通新聞社

…栃尾鉄道の終着駅である栃尾駅を紹介

『懐かしのトツテツ』

多川 昌敏/著 懐かしのトツテツ編集委員会/編

…栃尾鉄道に勤務していた著者が各駅を写真とともに紹介。乗車した人々の思い出話も数多く収録

『新・消えた轍』-ローカル私鉄廃線跡探訪-5 上信越 寺田 裕一/著 ネコ・パブリッシング

…廃線の跡がどのようなになっているか探訪記が充実、栃尾鉄道→栃尾電鉄→越後交通時代の車両一覧付き



映画会



中央図書館 2階講堂
入場無料・申込み不要 定員 87人先着
開場は上映開始時間の30分前です。

- 4/5(火) **バルカン超特急**
14:00～15:40 1938年/イギリス
(ミステリー・94分)
- 4/13(水) **花蓮**
14:00～15:45 2015年/日本
(ラブストーリー・96分)
- 5/20(金) **ならず者**
14:00～16:00 1943年/アメリカ
(西部劇・116分)
- 5/24(火) **ポネット**
14:00～15:45 1996年/フランス
(人間ドラマ・97分)
- 6/8(水) **僕たちの家に帰ろう**
14:00～15:50 2014年/中国
(人間ドラマ・103分)
- 6/28(火) **六ヶ所村ラブソディ**
14:00～16:05 2006年/日本
(ドキュメンタリー・119分)

